

シリーズ 私の一冊の本

食品栄養科学部 野沢龍嗣先生

土屋雅春著 『医者のみた福澤諭吉：先生、ミイラとなって昭和に出現』

閲覧室 2階 学生文庫 中公/1330 中央公論社 出版
自由閲覧室 推薦図書 289.1/F 85

福澤諭吉は1万円札の顔として毎日のように目にしているが、その人となりはあまり知られていない。はばたき 95号で、国際関係学部小谷野教授が既に福翁自伝を紹介されているが、本書では医学・科学面での諭吉の活躍が紹介されている。

諭吉は3回にわたる欧米での見聞で、欧米人との体格・体力の違いを痛感して、この違いが食生活にあると見抜き、従来の日本人の魚、穀物、野菜の食事から牛肉、牛乳、パンを中心とした食生活に改善すべく、食事を栄養学的見地からみる「食養」という考え方を広めた。この食養の精神は我が食品栄養科学部にも連なっている。しかしながら、諭吉が広めた西洋式食生活は現在の飽食の時代になってその弊害が生活習慣病という形で現れてきて日本古来の食生活の良さが見直され、また食品栄養科学部では生活習慣病の克服が大きな研究テーマになっていることに時代の遷移とめぐり合わせに感慨を覚える。

もう一つこの本で興味深かったのは、脚気をめぐる論争である。脚気は米食に伴うビタミンB1欠乏症であるが、当時は原因不明の深刻な病気であった。特に、富国強兵を担う陸軍、海軍の兵士に多数発症した。その原因をめぐり陸軍と海軍が激しく対立し、陸軍には、ドイツ医学を修めた後の文豪森鷗外ら官学（東大）派が、海軍にはイギリス医学派の高木兼寛らがあり、諭吉は後者を応援していた。海軍は高木の発表した脚気の原因説に基づき、麦飯を採用して、日清・日露戦争では脚気患者がほとんど出なかったのに対し、陸軍は脚気菌という細菌原因説で、米食に固執したため、戦死者の1/4以上が脚気による死者であったという。私が日本細菌学会に始めて加入した当時、発表の場でいつも慶応大学と東京大学出身者の間で他の学会では見られない激しい感情的な論争が繰り広げられ、びっくりしたものだが、本書を読んで、これも明治の時代の論争に基を築いていたのかと納得がいった。

細菌学者の北里柴三郎は破傷風菌の産生する毒素を動物に接種して、血清中に毒素の作用を中和する物質を見つけ、これを抗毒素と命名し、治療応用へと発展させた。抗毒素は免疫学的には抗体であり、欧米では抗体の発見者としてパスツールと並んで北里は免疫学の父と称えられている。この北里も帰国後の日本では冷遇されていたのを、諭吉は物心両面から支援したことも紹介されている。

著者の土屋教授（慶応大医学部内科）とはかつて日米医学会コレラ部会で同席した縁もあって、この本は一気に読み下した。前述の福翁自伝とあわせ読むと、明治の先達福澤諭吉の偉大さが浮かび上がる。